なぜ英語が話せないの？

〈64〉

会話上達法第三部

スラングを学ぼう

欠かせぬ表現増やす努力

外国で生活する際、どうしても不可欠なのがスラングの知識。知らないと、チンプンカンプン。途方に暮れることも多い。

久留米市内の会社員は、かつて米国滞在中、友達から「What's eating you?」と声をかけられた。何も食べていないのに、といぶかっていると「eat にはむしばむという意味がある」という話。直訳すれば「何があなたを悩ましているのか」になり、日本語なら「どうかしたのか」「何かあったのか」に相当する。

「Soap opera」も知らないと戸惑う。「メロドラマ」のことだが、昼間、主婦向けのテレビ番組（よろめきドラマ）のスポンサーは、せっけん会社が多いことから、いつの間にかこう呼ぶようになった。「いくらですか」と聞いて、相手が「ten bucks」と言えば「十ドルです」のこと。「green-back」は、裏が緑色という意味から、米国の紙幣を表す。「一ドルコイン」は「silver dollar」である。

レストランで「割り勘にしよう」なら「Let's go Dutch」。「Dutch account」も割り勘である。「chick'n ken」は「ひな鳥」でなく「憶病者」を指す。かつて米国の若者たちの間で、命がけのゲームが流行したことがある。車に乗った若者が道路の白線に沿って双方から猛スピードで接近する。ハンドルを切らねば、激突して二人とも死亡は確実。だから衝突寸前、怖くなった方がハンドルを切って逃げる。すると直進した方は「you're chicken」と叫ぶ。「オレは憶病者じゃない」なら「I am not chicken」と言えばよい。

米国人との会話では「No kidding」もよく出てくる。「冗談でしょう」「本当？」の意味に使われ「冗談じゃなく本当ですよ」なら「I'm not kidding」。「頭にくる」はどう言うか。「upset」が適語で「I was upset when I lost my purse」といった具合。

そのほか「hangover」（二日酔い）や「girl Friday」（有能な秘書）「cold shoulder」（相手に冷たくする）なども出てくる。

「二日酔いで、頭が割れそうだ」のニュアンスなら「I have a terrible hangover」「彼女に振られた」は「She gave me the cold shoulder」となる。

スラングは、教科書にはあまり出てこないので、外人と話す機会があれば、詳しく聞き出すなり、少しずつ自分が使える言葉、表現を増やす努力が欠かせない。

なめらかな会話にはスラングの使用が欠かせない